

カンボジアの「豊かさ」、 そして日本という国 文化遺産保存活動を通して

民族の象徴である文化遺産がカンボジアの発展に寄与する役割は大きい。異国の地で文化遺産の研究保存活動に携わりながら、そしてカンボジア社会を見ることで、日本という国が見えるような気がする……。



上智大学アンコール遺跡国際調査団
荒樋 久雄

2002年 プノン・クロムの御来光

2002年の元旦は、アンコール遺跡の南に付置する聖山プノン・クロムの頂上での御来光^{ごらいこう}で明けた。日本と比べ、体の芯^{しん}より冷え込む寒さはないにしても、カンボジアの12月は一年で最も気温が低い。海外からの観光客ならば涼しく感じるこの季節、私にとっては、カンボジア人がよく口にする「ローギア」（「寒い」という意味）という言葉が妙に合う、肌寒く感じられる季節である。

朝日が昇る東の方角には、琵琶湖の数十倍はある広大なトンレサップ湖と湿地帯が眼前に広がる。夜が明け始め、東の空が白み始めて既にかなりの時が経つ 水平線には濃い霧^{もや}が立ち込め「今年の御来光はちょっと期待薄かな」という多少、残念な気持ちで東の空を見ていたその矢先、濃い霧を吹き飛ばすかのように、橙色の太陽が強く地平線より昇った。

惚れ惚れするようなカンボジアでの新年の御来光を見て、何故か、アンコール時代の王達もこのトンレサップ湖より上がる雄大な太陽に、未来永劫の王朝の繁栄を見たに違いないという、突然のインスピレーションが「ハッ」とよぎった。

アンコールとの出会い

クメール建築と私の直接的な出会いは89年にまで遡^{さかのぼ}る。思い返すと、昨今の大学生のように、学生旅行で東北タイのピマイという所に行き、そこで見たクメール建築の大伽藍^{がらん}に感銘を受けたことが、私の人生を大きく変えたともいえる。

大学では日本建築に取り憑かれ、各地の神社仏閣の調査見学に頻繁に出かけた。卒業後の青年海外協力隊時代には、派遣国であったモロッコにあるイスラムの建築美を堪能した。またその後ベルギーに留学し、ヨーロッパ建築に埋もれる機会も得た。

今から思えば、ピマイのクメール建築との出会いの後、世界中の絢爛で優美な建築を多く見る機会を得た私が、カンボジアのアンコール遺跡に戻って来た理由の一つには、建築史学びたてのあの 89 年の夏、タイのクメール建築を通して見た最初の「建築美」を、誕生間もない雛が、最初に見たものを母親と見なすかのような、ある種の生理反応が働いたのかも知れない。

1996 年 10 月から現在まで、日本へ、一時帰国で帰ることはあるものの、アンコール遺跡のお膝元、カンボジアのシェム・リアップに居を構えてクメール文化遺産に関する調査・研究活動を行っている。1997 年 11 月よりは、上智大学アンコール遺跡国際調査団へ派遣された国連ボランティア(United Nations Volunteers)として同調査団で活動を行なう。一般的にみて、国連ボランティアというと、世界各国の省庁や、UN 関係の国際機関に配属されている例がほとんどだと思われるが、私の場合、日本の学術組織という、一種、風変わりな位置付けに身をおくこととなる。

カンボジア文化遺産の現状



(写真1)無残に削り落とされ塔四隅のアプサラ。この傷跡は終生、消える事はない。コンボンスヴァイのプリア・カン。2002年1月。

一般の人が抱くカンボジアのイメージといえば、「長く続いた内戦」「ポル・ポト時代の大量殺戮」「地雷」と「貧困」など殺伐とした「負のイメージ」しか想起されないのが実情であろう。これら「負のイメージ」が大勢を占める中において、アンコール遺跡に代表される壮大なクメール文化遺産は、カンボジアの「輝かしいイメージ」としてその対極に位置し、聳立した意味を持つ。

カンボジアは、周知の如く、1970 年から 20 年以上続いた内戦と国内混乱により、人材の消失、インフラの破壊、資金難などが今もなお全分野にわたり深刻な問題となっている。民放の誇りの象徴である文化遺産は、ポル・ポト政権下において放置・破壊され、人心の荒廃を招いたとされる。現在も遺跡の盗掘事件が絶えないのは当時の虐政の影響がトラウマとして暗い影を落としているせいであろうか。

2002 年の元旦の御来光を見た後、未だ密林に埋もれた遺跡であるコー・ケーとコンボンスヴァイのプリア・カン

いう辺境遺跡へ調査に向かった。両遺跡とも、建築的、芸術的に素晴らしいことは、言うに及ばないが、その美しさを全く台無しにするかのような遺跡破壊の惨状に唖然とした。

とりわけ、コンボンスヴァイのプリア・カンにおける盗掘は、想像を絶するものであった。各隅の四隅にあるアプサラ（天女）は、石鑿により削られ、ブロックごと削り外されていた（写真 ）。また、楣石の中に彫られた仏陀はその尊顔のみがもぎ取られていた。敬虔な仏教徒であるはずのカンボジア人が、なぜ仏陀の顔をもぎ取るような非行、悪行をなせるのか、私にはこの蛮行の意味するところが理解できなかった。

内戦中であるならまだしも、平静を取り戻したはずのカンボジアで、このようなヴァンダリズム(蛮行)が行われていることに対して憤りを感じた。数年後には、この遺跡にも道路が出来、一般の人々が、文障なく遺跡へ向かうことができるようになる。その時、カンボジアの人々はこの惨状、そして白国民の誇りである文化遺産に対する蛮行をどう受けとめるのであろうか。

これはどうみても、一部の非道な者が行なったカンボジア人全てに対する修復不可能な恥辱でしかない。そしてそれは「負の傷跡」「恥辱の傷跡」としてカンボジアの人々が未来永劫にまで背負う傷跡として残される。アンコール遺跡でカンボジアの文化遺産研究をしている者の一人として、私自身、20世紀末の私がいた時代の蛮行を、10年、20年後の人々にどのようにして伝えるべきなのか、如何ともし難い責任が重く肩にのしかかる。

カンボジア文化遺産保存の方向性

カンボジア情勢は急速に安定化へ向かったとはいえ、文化遺産の保存分野が抱える深刻な問題は枚挙にいとまがない。「カンボジアの文化主権と遺跡の所有者の不明確」、「学術研究・修復現場にお



（写真2）アンコール史を塗り替える大量の仏像発見。
2001年8月。同発掘には、7名のプノンペン芸大考古学
部学生も参加。パンテアイ・クデイ発掘現場

けるカンボジア人の人材不足」、「カンボジアの研究段階、基礎的研究の遅れ」、「学問分野における自律史の発芽の必要性」、「カンボジア行政組織の脆弱性」、「財政問題」など多岐にわたる。またその一方で、長年の遺跡の放棄は、技術的な側面として「伝統技法の断絶」、「修復技法の多様性」、「修復作業を通しての技術、価値観の将来への伝承」という課題を抱えながら保存活動が進んでいる。

そのような複雑で多岐にわたる諸問題を孕みつつ、カンボジアの文化遺産の保存修復事業では、ただ単に遺跡を修復・保存するという作業だけではなく、

カンボジアの人たちが自負と自信を取り戻し、彼ら自身の手で文化遺産を保全し、後世へ伝える保存・修復作業が出来るような支援を行なうとともに、カンボジアの人々の自立と精神的復興を援けることが求められている。民族の象徴としての文化遺産がカンボジアの発展に寄与する役割は非端に大きい。各人各様の知恵を出し合って、アンコール遺跡を取り巻く環境（人・遺跡・自然など）が共生、共存できるバランスある環境を生み出すことが求められている。

上智大学アンコール遺跡国際調査団とは

私が属す上智大学アンコール遺跡国際調査団では、前述した目的の実現化を信条に、遺跡での修復・発掘作業を通して実習・技術移転、現場研修型プロジェクトを実践している（写真 ）。アンコール遺跡の調査・研究および保存・修復活動プロジェクトでは、1980年より2002年1月までに5回の予備調査団と34回に及ぶ調査団を派遣し、継続的な調査を行なっている。

それらの調査・研究・修復の成果は、日・英・仏・カンボジア語の17冊の報告書『カンボジアの文化復興』（vol.1-17,1984-2001 上智大学アジア文化研究所）に纏められている。さらに『アンコール・ワットの解明シリーズ 全4巻』（2000年 連合出版）など、数多くの出版物を刊行する一方、講演会やセミナーなどを通じて広く一般への情報還元を行なっている。

このプロジェクトには建築、考古、地質、水利、水質、測量、植物・生態、地形、農村調査、慣習法、民族などの専門家が参加している。また上智大のみならず、早大（政経学部）、東北工大、金沢大、京都府大、日大、帝塚山学院大、奈良女子大など25を超える国内外の大学などの学術機関の関係者が参加しているほか、奈良文化財研究所、フランス極東学院、World Monument Fund、ロンドン大学SOAS、ルーヴァン・カトリック大学などと情報交換・連携しながらプロジェクトは進められている。

私たちの現在行なっている活動は非常に限定されたもので、カンボジアの遺跡全体に対し活動を広げるようなことは到底不可能である。そのような状況の中、私たちの活動は、大まかに分けて、

- （１）緊急を要する短期的な保存活動
- （２）中長期的な視点を持った保存・維持管理活動
- （３）文化遺産の保存の将来を担う人々への人材育成

の3点に絞られる。また、3番目の人材育成という側面は、カンボジア人の文化遺産保存の明日を担う人材育成という側面が大きいですが、日本人の若者の育成、という点も含められる筈である。

カンボジアでの活動に対する自省

私自身、カンボジアと出来るだけ長く関わりたいと考えている。現に私の属す調査団の団長である上智大学の石澤良昭先生は1961年に足を踏み入れて以来、40年以上にわたり、カンボジアの文化復

興に尽力を注がれている。しかしながら、例え長く活動したとしても、私たち外国人は数10年単位でしか直接的に関わることは出来ない。つまり私たちの立場は、彼らの長い文化蓄積の中では、「かりそめ」でしかないことを肝に銘じている。

カンボジアに長くいても、主役はあくまでもカンボジア人自身であるということを私自身、決して忘れることはない。だから彼らに恩着せがましくするつもりは毛頭ない。それでいても、心の片隅には私たちの行なっている行為が、何か形を変えカンボジアの人々に迷惑がかかっているのではないかという一種の危惧は絶えずある。

日本へ戻ると10年来、お世話になっている奈良の文化財修理現場主任のところへ挨拶に行く。そこへ行くと日本の伝統的で厳格な雰囲気を感じ取れると共に、カンボジアでの自らの行ないを自照できる。そこではいつも「カンボジア人に迷惑をかけて」と戒められ、自らのカンボジアでの活動への自嘲・反省を促すこととなる。また、「日本人」という「他所から来た者」が現地カンボジアの中で働く際に、気を引き締めなければならない注意点が浮かび上がり、自らの活動を自省する機会を得る。私にとっていわば禅問答のようなものかもしれない。

日本社会の閉塞性を考える

一方、私たちの日本社会はどうであろうか。「縮みの社会」「インモビリティ(immobility=動けないこと)社会」など、日本社会の閉鎖性が叫ばれる。政党や地方公共団体の広報誌には「活力ある社会を」というスローガンが掲げられる。戦後の高度経済成長のもと、日本は経済的には世界最高水準にまで到達したことは誰しもが認めるところである。

これだけ、資産を保有し、世界一豊かであるはずの日本人は、その豊かさを享受することなく、将来への不安が先行する。数年前、日本で見たドイツ製乗用車のテレビコマーシャルでは、ハムスターが小輪の中をがむしゃらに走る姿が画面に映し出されていた。それは、目的の見えない将来への心理的不安と躍起になって働く日本人の姿と重なり、それを比喩的に表現したものだ、私は解釈した。

「自転車操業」という言葉があるが、日本人にとって、今までの急成長、急加速の歩みを止めれば、それは即、失速・失脚するかのような恐怖感に取り憑かれているようでもある。また、冬の季節となると、風邪薬のコマーシャルでは、熱を出してでも、無理を押しながら会社へ出かける会社員の姿が映し出される。これらの類の宣伝を見ると、日本社会にはまだまだ無理をすることが「美德」であるかのような風潮がある。しかしながら、誰しも何故、無理をしなければならないのか、という問いに答えることができない。周辺環境に、作り出された強迫観念があるように思われる。

また、閉鎖性をつくりだしているもう一つの側面として、法律や規制といった人の行動を規制するものがあまりにも多いように思われる。本来、法律・規制などは、過去に起こった問題、事件などを

顧み、新たな再発を防ぐ為に設けられる。そしてまた、人の集団行動の中で最低限守るべきルールを指すもので、人の営みをより円滑にし、豊かにする為に識けられるものである。

しかし、この法律・規制が制定された後に、その枠にそぐわない事例や、その目をかいくぐるような事例がみられ、その度に改正が繰り返されてきた。その結果、私たちは法律にがんじがらめで、身動きが取れないようになってきている気がしてならない。世の中を豊かにする筈の法律・規則が、あたかも自らの自由を奪うかのように映る。

学校教育においても、校則の必要性について、説明がないままに理不尽に押し付けられる思いがあり、青年期の反抗心がまた違った形として表れる。子供の頃より、校則、学則というものの重圧感の中で成長してきた青少年には、成人してもかなり様々なものが重圧として感じられるのではなからうか。また、その上に過度の責任問題という、失敗が許されない社会がある。何を行なうにしても、「この問題の責任は誰が取るのか」、という点が指摘され、様々な活動に対して余りにも制限があり過ぎるようでもある。現代の子どもに見られる成人病はその外面的な現れとしか言いようがない。

私は、この右肩上がりの経済成長が悪い、と言いたい訳ではない。しかしながら現代社会はもう少し身近にある「豊かさ」を享受し、過去より現在へ存続されてきた大切なもの、過去の人々による様々な生産物をふり返るぐらいのゆとりかあってもよいのではなからうか。

カンボジアの微笑

私の知っている限り、ここシエムリアップは、1993年頃より日本人が駐在するようになった。私が来た95～96年頃には、それら日本人現地駐在者の数は、10人にも満たない状況であった。そういった状況が98年の第二回カンボジア国政選挙まで続いた。しかしそれ以降は増加の一途を辿り、現代では60人を超えるという。それらの多くは、昨今の観光ブームで沸く、観光産業に従事する人々で、日本社会とはまた違ったカンボジア社会に心地よさを見出した日本の若者である。

上述のようにカンボジア自身、数多くの問題に直面していることは確かである。しかしながら、人々は「カンボジアの微笑」と揶揄されるぐらい、非常に実直で温厚であり、文化遺産・自然遺産にも恵まれた素晴らしい国であることも確かである。ここカンボジアには、日本では失われてしまった心より笑える雰囲気が残されていることを痛感する。また、カンボジア社会という別社会を見ることによって、日本という国がどことなく見えるような気がする。

「国際援助」「国際協力」「経済援助」という言葉を後楯に、カンボジアの人々の肩を借りながら、恩恵を得、成長しているのは、他でもない、私たちであるをつくづく思う。

(「J-eyes vol.4」2002年3月 一部加筆修正)